

# 平成14年度学生セミナー委員たちが楽いた 分散の中のコミュニケーション

日本各地はもちろん遠くハワイ島観測所にまで広がる総研大。院生の専攻も、歴史や民族学、エネルギーや物質、生命情報や電子情報と多種多様。その上、博士課程で総研大に入るまでの履歴も各人各様。多様化する現代社会の申し子のような彼女たち、彼たちが語る総研大院生の今。

## 学生セミナーで広がった交友関係

新海 4月18,19日に開催された学生セミナーに関しては、自分たち実行委員は、けっこう楽しんだと思うけれど、新しく総研大に入ってきてセミナー委員になった1年の人たちは、まだ何か堅いね。

長沼 私たちだって、最初の委員会で学生セミナーの説明を受けた時、「いったい何をするのか」、「どうすればよいのか」は、まったくわからなかった。あれよあれよという間に始まって、あっとい

う間に終わってしまったという感がある。

田中 入学して最初だからね。僕たちも少しずつ仲間と親しくなっていたわけだから。

新海 こういう場面で親しい関係を築くのは大事だと思う。学生とはいえ博士課程では、自分たちで切り開いていかねばならない人間関係がいろいろある。学会で研究者と仲良くなるのもその1つだし、人間関係を築くスキルは重要だ。

田中 でも、すぐにそうできる人もいれば、できない人もいる。

新海 親しくなるという意味では、

一番役に立ったのは、裏のメーリングリストだね。セミナー委員で構成されている大学の正式なメーリングリストは、事務的なことが回ってきたり、先生たちも見る。

一方、入学式のときに僕らは別のメーリングリストを作った。それにはここにいる全員が入っている。最初は5,6人だったんだけど、皆が集まってきて今は何人くらいかな？

長沼 21人。他の大学の博士課程の人も入っていて、互いに自分の勝手な意見や馬鹿なトークを送りあうのが面白い。セミナー関連に

しても、正式なほうには、実行委員長の田中君から「講師の方に早く連絡してください」といったことがまわってくる一方で、同じ時間帯に裏メールでは、「いいかげんにして、早く連絡しろよ」といったコメントが回る。

田中 裏メールリストを始め、学生セミナーの開催を通し、横のつながりができたのが一番の収穫だったね。お互いが遠くに散っているから。

新海 最初に馬鹿をやったこともよかった。僕はわざわざ京都まで行って、あちら方面のメンバーと

総研大学生セミナーは、総研大大学院生が自主企画するもので、葉山キャンパスで入学式に続けて開催される。平成14年度のテーマは「我々の目指す研究者とは？」で、4人の講師を招き、4月18,19の2日間、講義と議論を繰り広げた。毎年6月に各専攻の博士課程1年から20名余の実行委員が選出される。

今回の座談会には、平成15年度に向けた第1回委員会に、引継ぎのために出席した14年度委員が参加している。





長沼さやか(ながぬま・さやか)文化科学研究科地域文化学専攻・国立民族学博物館。中国南部の船上生活者の研究を行うため、広東省広州市の中山大学に9月から2年の予定で留学。

まず飲んだ。その後、忘年会は真中の名古屋ですることになり、これまた参加。徹夜で飲んで、朝一番の新幹線に乗って東京に戻った。名古屋駅で寒いな、といいながら。けっこう集まったよね。

長沼 忘年会には10数人は集まったし、友だちの友だちが来たりして、さらにつながりが広がっていった。他の大学の状況を知りつつ、総研大の特異性を学びつつといった感じだった。

新海 こういう横のつながりの中では、同じ専攻の人だと話せないようなことも、話せるということがある。根っこでは、同じ総研大の学生という意識もあるから、安心だし。

長沼 近すぎず離れすぎずというのがいいんじゃないかな。同じ研究室や同じ専攻だったら、ライバル意識がどこかにあるからね。

#### 総研大での研究環境

杉田 高エネ研(高エネルギー加速器研究機構)には、僕と同じ博士課程2年(D2)の総研大生は4人だけ。他の所は？

長沼 民博(国立民族学博物館)では結構多い。院生として登録しているのは30人くらい。3分の2は女性。

新海 極地研(国立極地研究所)で

は、全部で15人。今年入った3人はすべて女性だった。

田中 僕がいる遺伝研(国立遺伝学研究所)は多い。D4、D5含めると45人いる。毎年10人くらいは入ってくるからね。

加藤 生命体科学専攻の院生は、葉山キャンパスには8人いて、後10名近くの人たちが総研大に参加するさまざまな研究所で各自のテーマに取り組んでいる。

新海 先生たちは観測などで忙しい。自分の研究のアシストを学生に期待する向きも多少はあると思う。

杉田 その辺りは難しいよね。手取り足取り教えるのが博士課程教育か、といわれると、そうではないんだけど…。

田中 うちの研究室も、先生たちは皆忙しくて、研究室にいないことが多い。中間発表があるといっても、ディスカッションすら思うようにできない状況だ。

先生との打ち合わせは、秘書を通して何とか入れてもらっている。予定がずれ込んで、12時間待ちという事態の先輩もいた。総研大には国家プロジェクトの中心となる先生も多くて、役職や業績のある先生ほど忙しい。

杉田 高エネ研では、プロジェクトによっては、時として学生をマンパワーとして扱う場合もある。

僕の所属するグループは比較的小さく、学生は自分だけで、基本的には助手の先生たちが面倒をみてくれている。彼らは学生を研究以外の雑用のためのマンパワーとしては扱わない。グループとしてもそういう意識が根づいているように思う。

長沼 マンパワーというのは、具体的にはどういうことをしなければならぬの。

杉田 例えば自分の研究対象が、大きなプロジェクトの装置開発だったり、データ解析だったりしたとすると、それだけに没頭することは許されず、観測実験の夜のシフトに入ったり、自分の研究とは関係ない実験装置の設置を手伝わなければならないかたたりするようだ。

長沼 理工系の研究はチームを組むので、マンパワーがないとやっていけないところもあるんじゃないの。文化系は、1人1人が独立した研究をやるので、マンパワーとして扱われることはまずない。でも逆にプロジェクトの組みようがなくて、科学研究費の申請時に困るところもある。

杉田 もちろん、特に大きな実験ではマンパワーとして働かないと実験そのものができないし、実験に関わるいろいろな仕事に携わることで学ぶこともたくさんあると

思う。  
田中 うちの研究室の場合、いい意味で研究の自由度が高い。ただ、自分の好きな研究テーマを選べるけれど、個々に独立したテーマになりがちで、とにかく自分でやっつけていかねばならぬことが多い。

先輩や助手には、自分から聞きにいけば、アドバイスを貰えるが、分野がちよっとでも違うと、ディスカッションが漠然としたものになる。

新海 最近感じているのは、授業料を払っているのだから、教育サービスを要求するのは、ある意味で当然のことだと。

他の分野の教官や研究者でも、必要だったら聞きに行きに行って教えてもらえばいい。それをしないと総研大という共同利用機関をベースにした大学院にいる意味がない。他の大学と違うのは、そういう知識や施設を利用できる点なんだから。

杉田 それくらいの勢いがないと、やっていけないかもね。

加藤 私は生命体科学専攻だけれど、総研大の幅広さが、この専攻には凝縮されているような気がする。大半が生物の研究者だけど研究分野は多様で、自ずといろんな話が聞けるので、総研大の恩恵をたいへん受けていると思う。

DNAの配列を読んで解析する



新海雄一(しんかい・ゆういち)数物科学研究科極域科学専攻・国立極地研究所。地球磁場の脈動メカニズムを研究。学部時代から最近まで、アメリカンフットボールの選手を務めていた。



研究をやっているけれど、サンプリングをする時には生態学の先生の教えを請い、分類する時には博物館の先生に聞き、時には他の大学の先生にお世話になったりもしている。多数の先生方と一緒に私のドクター論文が動いているのを、実感する。

指導教官は、博士課程の学生のことを「仲間」だと言ってくれる。これは嬉しい。

長沼 本当に、研究者の卵としてではなく、ちゃんとした研究者として扱ってくれる。

杉田 一人前の研究者として扱ってもらえるということは、すごくいいね。

田中 早くに研究者たるもののシビアさを味わっていると思えばいいのかもしれないね。

#### なぜ総研大に進学したか

田中 博士課程に入って、新たにいろいろな分野のさまざまなキャラクターの人に会えるのは、総研

大の大きなメリットだよ。これは学生セミナーにも相通ずるものがある。何といても、世界とのつながりのある一流の研究者に会い、講演を聞いたことは大きな財産だと思う。

長沼 総研大はアクティブにならざるを得ない学校だと思う。日本では、学部、修士、博士がすべて同じ大学というのが一般的。でも総研大は博士課程からしかないから、必ず違う大学から入ってくる。私は、学部、修士、博士と全部大学が違う。自分のやりたい研究をするために、億劫だと思うこともあったが、選んで進学してきた。

加藤 私も、今の指導教官に教えてもらおうと総研大に入った。修士卒業後、生物系のところに就職したけれど、2年間働いてみて、もう少し自分で研究してみたいと思ったので。

田中 僕も、こういう研究をやりたいと思って指導教官を探していたら、総研大の先生にそういう人がいた。

杉田 修士の時の指導教官が高エネ研を退官されて来た先生で、修士の学生を高エネ研の各プロジェクトに参加させていた。僕も現在の先生のところに行くことになった。修士を終えても、教科書の中身を理解した程度で、自分の研究

杉田 圭(すぎた・けい)  
数物科学研究科加速器科学専攻・高エネルギー加速器研究機構。修士課程の時から高エネ研・低温工学センターで、超伝導磁石の研究開発に携わる。



だと胸をはれるようなことはまだ何もできないなと思い、博士に進んだんだ。

新海 僕は博士に進むつもりは全然なかったが、修士の指導教官に勧められた。最初はそんな気が起こらなかったが、勧められているうちに「めったにない機会かな」と思うようになって、突如決断したんだ。じつは、コンピュータソフト関連の企業に就職が決まっていたんだけど。

修士は私学だったので、学費の関係で先生の懇意にしている教官のいる極地研に、ということになった。

田中 とにかく生物関係の研究、特に進化に興味があったので、その研究がしたかった。だから就職活動はまったくしなかった。

長沼 学部の時から教師になろうと思っていた。でも卒業時に「このまま学校の先生になっていいのか」と考えた。何も知らない教師になるのが嫌だった。元々興味もっていた人類学のフィールドワークは、専門の大学院に行く必要がある、フィールドワークの費用もちゃんと取ってこなくてはならない、外国の機関に受け入れてもらわなくてはならないと、いろんな面があり自ずと鍛えられる。

進学時にはいつも、教員採用試

験か進学かで引っかけたが、経験を積んで、その上で先生になったほうがいいと思った。

9月から2年間中国南部でフィールドワークをする予定で、これは論文を書くためだけに、それだけでなく、今後の自分の人生の題材にできれば、と思っている。

#### 博士号とは何か

新海 就職するか、研究者になるかは別にして、博士号を取ったその日に「博士号なんてたいしたことない」と一言いってみたい。要は研究者としてのライセンスだと思う。ここまでやってきたからには、はじめとして取りたい。でも最近、取れるのかなという不安が出てきた。

田中 その不安はみんな感じている。でも博士号を取った瞬間に「たいしたことはなかった」といってやろうと、これまたみんな思っている。

新海 ライセンスといっても、博士号を取ってすぐに職を得られる人は、なかなかいない。研究者になろうと思っても、ポストがないとどうにもならないよね。

杉田 ポスドクが当たり前だね。先を考えてしまう。

長沼 博士号は日本人にとって



田中 剛(たなか・つよし)  
生命科学研究科遺伝学専攻・国立遺伝学研究所。代謝経路の種間比較を行い、パスウェイ(経路)進化がどのように起こってきたかを解析している。

は、ステイタスという意味もあるのでは。

**田中** ステイタスの割には、就職活動でいかされてない。博士号をもっているからといって、修士よりも専門的な能力をもつという扱いは受けない。

**長沼** 日本人の複雑なところで、学歴差別もあるが、逆学歴差別もある。博士だから就職できないとか。

**加藤** 私が博士号をとろうと思ったのは、働いていた時に博士まで行かないと、「私はこういった専門をもっています」といえないと感じたから。

**田中** 研究所の研究職に就く時はライセンスで、企業に入る時は専門家、プロフェッショナルとしての認可証とか。

**杉田** 自分の研究に直接繋がる会社なら、プロとしての扱いを受けるだろうけど。

**田中** よく聞くのは、博士として採用されても、入ると単に3年間研究を会社とは別のところでやってきたという扱いになる可能性があるということ。給料も、修士卒業後3年働いた人よりは少しましな程度で、それ以上の何者でもないらしい。

**新海** はっきりいえば、博士号をもっているからといって、その会社に実りをもたらす人間かどうかの保証はない。もっと手に職のある人のほうが有益だということも問々ある。

**杉田** 実際に使えるというか、知識や技能だけでなく全てを統括して役に立つ能力をもっているかどうかという問題だと思う。そういう博士がいて、会社が必要とする分野と重なるなら、エキスパートとして、すごい効果があると思う

けど。

**加藤** 会社としては、エキスパート云々というよりも、責任を負わせてもいい人間が欲しいのだと思う。

**新海** 自分たちの思う博士号の価値と、会社の思う博士号の価値に差があるから、文句が出てくるのかもしれない。

**長沼** 文化人類学という手法を学んで、その手法を生かせる職業は研究者しかない。学んだものを生かせる企業はまずないと思う。でも、今の私には、博士号自体ではなく、フィールドでの経験や先生との対話によって得た経験のほうが重要だと思っているので、みんなの話を聞いていてもピンとこない。

**加藤** 興味のあることを研究することはもちろん大切だけれど、就職してお金を稼ぐことを考えた時に、博士号がライセンスとしてどう使えるかは、やはり気になる。身につけた知識や技能がメインだとはわかってはいるけど、世間の扱いは気になるところよね。

**長沼** 人によって違う意味をもつものを、一口にライセンスだと表現するのもナンセンスだと思う。

**田中** 米国や欧州には博士号に対するきちんとしたイメージがある。ライセンスだとか、プロとしての認証だとか。でも日本の場合、人によってイメージがぜんぜん違って、統一見解がない。

今、国が博士課程進学を推奨しているけれど、実際それで何を目指しているのかは僕たちもわからないし、国の人たちもよくわかっていないんじゃないかと思う。まずは、博士課程進学の目的を明確にするべきではないかな。

**新海** 国の政策という意味では、2005年の大学や国立研究所の独立法人化に絡んだ、研究所の統合問題など、生々しい話が、僕たちにまで伝わってくるね。

**田中** ふつうの大学と違って、国家プロジェクトと直結していたり、予算規模が大きい分、行政や政治の世界が透けて見えてくると

加藤由実子(かとう・ゆみこ)  
先導科学研究科生命体科学専攻・  
葉山キャンパス。各地の海草  
(うみくさ)の遺伝子解析を行い、  
集団内解析、進化の系統を研究。  
修士課程後、2年間就業していた。



いうことはある。学生としては巻き込まれたくないな。

#### 将来をどう描く？

**長沼** 教師になってうんとはじけたい。でも、教師になっても研究から完全に離れたくはない。

博士課程に進学したのも、いろんなことができて、いろんな人とコミュニケーション可能な人間になりたいと思ったから。相手を尊重すれば、相手の中に入っていけると思っている。まずは、9月からの中国南部でのフィールドワークでそれを実践したい。

**加藤** 私は、生き物分野にずっと携わっていただけたらいいな、と思っている。今のテーマを選んだのは、種の絶滅などを遺伝子レベルで説明できると、環境問題などでも説得力があるなと思ったから。そういう職に就ければと考えている。

**田中** できれば研究者になって、自分の研究に対して、自分で納得のいく結論を出せればと思っている。博士課程のこの3年間は、自分がそれに足るだけの能力を持っているかどうかを見極めるステップだと。

**杉田** 博士課程の後で、教職課程をとってもいいかな、とも思っている。一方で、研究テーマの加速

器用超伝導磁石の研究は、国内では高エネ研くらいしかやっていないので、一度海外に出てみたいとも思っている。

スイスのCERN(欧州原子核物理学研究所)で建設中のLHCという加速器の超伝導磁石の一部は、日本が担当していて、これが動き始めるのがちょうど博士課程卒業のすぐ後くらいになるはずだ。

**新海** 研究者になろうかと思った時期もあるが、今は研究職はお腹一杯かな、という感じもしている。

この間、オーロラ観測のためにアイスランドに連れて行ってもらったが、永住しようかと思うくらいよかった。いろんなところに行けるという意味では、研究者が一番いいのだけど。もし研究者になるのなら海外に出てみたいとは思っている。でも、自分が海外にいるイメージが湧かないな。

コンピュータ関係の企業に入ることも考える。データ解析のソフトは自分でつくっているし、そのソフトを先生も使うことがある。ソフトづくりは趣味のようなところもあり、そういう仕事も楽しいかなとも思う時もある。とにかく、世の中にはいろんな生き方があると思っている。

6月27日 蔵前工業会館にて  
(構成：由利伸子)

